

# 神話と祭礼の文化地理学的研究

米山 弓恵

(佐々木ゼミ)

## 序章 はじめに

文化地理学とは、文化を対象とした地理学である。文化とは「人と場所との相互関係から生まれた、生活様式としての固有<sup>(1)</sup>」の存在で、単体では成立し得ない。つまり、文化を研究することは、人と場所との関係を研究することにも関連している。

本論文は、文化地理学の5つのテーマのうち、1960年代に欧米で心理学や文化人類学の影響を受けて盛んになった環境知覚研究に焦点を当てたものである<sup>(2)</sup>。環境知覚研究とは自然に対する人間の知覚に焦点を当てたもので、それぞれの文化集団は自然環境に対するメンタル・イメージを持っていると考えられる。文化地理学における環境知覚研究は、異なる地域の文化集団が、どのように環境を知覚し、地理的行動を行っていたのかを追求するものである。つまり、地理的行動の要因を追求するためには、環境がどのようなものであったのかだけではなく、文化集団が環境をどのように知覚していたのかを知る必要がある、ということである。その環境知覚を知る術として、文化地理学者の佐々木高弘は神話を挙げている。佐々木によると、人々は環境を知覚する際、信頼すべき何かに基づいて行動しているとされ、その信頼すべき何かとはさまざまなレベルで存在しているが、最も人間の行動を拘束するものとして神話があげられるという<sup>(3)</sup>。

神々による国土創造を説明する開拓神話は、全国各地に20ほど流布する神話である<sup>(4)</sup>。そのうち、兵庫県豊岡市の開拓神話では、開拓の際に大蛇を退治したことが由縁で行われる祭礼の説明がなされている。その祭礼とは、旧暦8月1日、大蛇に見立てた藁の綱で綱引きを行うというものであり、綱が切れると大蛇を退治したことになるという(以下、この祭礼を藁蛇の八朔と呼ぶ)。地

域によって内容は異なるものの、全国7か所でのみ伝承される非常に珍しい祭礼であるが、これまで藁蛇の八朔に焦点を当てた研究はほとんど行われてこなかった。そこで本論文では、藁蛇の八朔を行う文化集団が、どのように環境を知覚していたのかということと、神話・現地調査・地形図などさまざまな視点から考察し、祭礼の伝播ルートを明らかにすることを目的とした。そして、祭礼を神話の視点から追究することで、神話と祭礼が密接に関係しているということを明示し、これを将来の研究に向けての土台にしたいと考えている。

## 第1章 開拓神話の文化地理学

### 第1節 京都府亀岡盆地の開拓神話

京都府のほぼ中央に位置する亀岡盆地は、中央を貫流する桂川流域に広がる構造盆地で、四方を標高500～700mの山々に囲まれている。これらの山々から流れる河川は全て桂川に注ぎ、淀川へ合流し、大阪湾へと流れ込む<sup>(5)</sup>。盆地内での桂川の主な排水口は、盆地東部に位置する保津の谷である。しかし、保津峡は狭く蛇行した峡谷であるため、排水量が少なく、大雨時には洪水が起こりやすい場所となる。2013年の台風18号による桂川の氾濫で、亀岡駅が水没したのは未だ記憶に新しい。

さて、このような災害の起こりやすい地域に住んでいる人々は、どのように環境を知覚していたのだろうか。すでに、亀岡盆地においては佐々木高弘による研究がなされ、亀岡盆地に住む人々はその自然環境を湖のようだと知覚していたと論じられている<sup>(6)</sup>。さらに、複数の事例の検証から、神話が人々の環境知覚に大きく影響していることを指摘している。しかしながら本節では、今一度、佐々木の手順を踏みながら亀岡盆地を事例に、ど

のように環境が知覚されていたのかを検討していく。

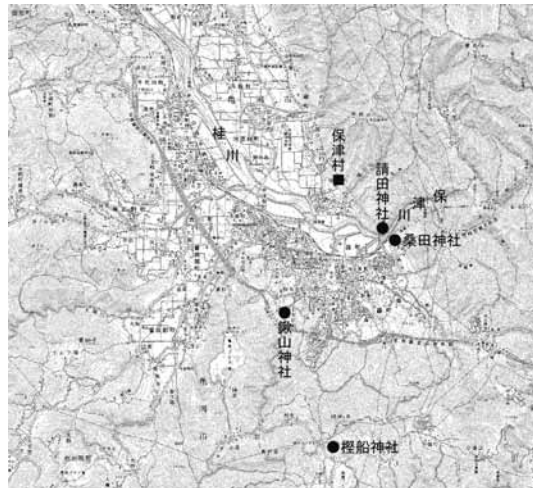
**伝承①** 丹波国の湖の水を全部何処かへ流してふと、その跡に平地が出来て、五穀が実るといふので、請田神社、鉾山神社、持籠神社の三柱の神様が、保津の谷川へその水を流す方法に就いて種々相談せられた。その結果、仕事の費用は全部請田神社が引き請けられ、その代りに鉾山神は鉾で、持籠神は持籠で、それぞれ仕事をせられたと伝えられている<sup>(7)</sup>。

亀岡盆地には開拓に関する数多くの伝承が残されているが、どれも大筋は同じで、その環境は湖や泥海であったとされ、神々が何らかの方法で湖の水を排水している。つまり、佐々木高弘が論じたように、亀岡盆地は湖のような環境だと知覚されていたということである。では、実際の自然環境はどのようなものであったのだろうか。考古学の成果をみても、盆地内の標高 280m 付近に湖岸の段丘の名残があることから、かつて亀岡盆地には巨大な湖が存在したと推定されている<sup>(8)</sup>。



第1図 旧亀岡湖 (注6『新修亀岡市史』54頁より)

それを踏まえて、神話に登場する神社を地形図に落としてみると、湖岸線沿いに神社が分布していることがわかる。

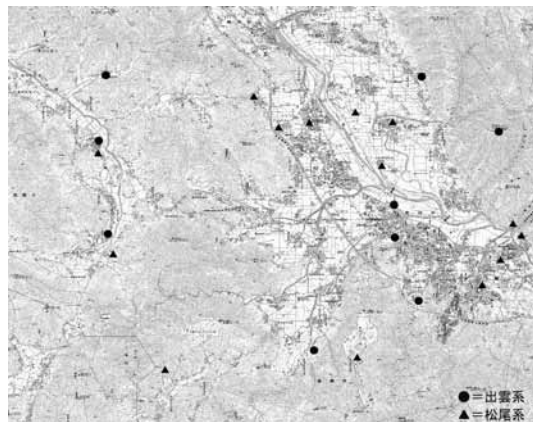


第2図 亀岡盆地の開拓神話に関する神社の分布 (筆者作成)

これらのことから、神話が亀岡盆地を湖のような環境であると知覚していたことは明らかである。

このように、人々の環境知覚を神話の観点から研究した佐々木高弘の手順を踏み、神話や地形図などの観点から洪水が起こりやすい地域を人々がどのように知覚していたのかということを検討すると、人々の環境知覚が科学的データとある程度的一致を見せるということがわかった<sup>(9)</sup>。

ところで、『新修亀岡市史』は、亀岡市内に秦氏が祖神として崇める大山咋命を祀る松尾系の神社が多く鎮座していることから、亀岡と秦氏には何らかの関わりがあったのではないかと推測している<sup>(10)</sup>。確かに、亀岡市内の神社を祭礼別に分類すると、主に出雲系と松尾系に分けられ、これ



第3図 亀岡市内に鎮座する神社の分布図 (筆者作成)

らを地形図に落としてみると、多く分布しているのは松尾系の神社であった。また、出雲系の神社が山麓に多く分布しているのに対して、松尾系の神社は盆地内、特に桂川沿いに多く分布していることがわかる。さらに、秦氏との関連を示唆するような伝承が、亀岡市大井町の大井神社に残されている。

**伝承②** 大宝2年(702)に、月読命と市杵島姫命が、亀の背に乗り大堰川をさかのぼって来、八畳岩の辺から水勢が強くなったので鯉に乗り換え、現在の河原林勝林島内垣内の在本湖まで来られた。勝林島に神社を建て鎮座したが、後に現在の場所へ移した<sup>(11)</sup>。

松尾大社の神使が亀と鯉であることは有名だが、その亀と鯉の背に乗って松尾大社の祭神が亀岡へやってきたというのは、偶然では片づけられないことのように思う。これらのことから、亀岡盆地を開拓したのは秦氏ではないかと推測される。通説では、水を排水するために必要な土木技術は渡来人がもたらしたとされている。したがって、開拓に渡来人が関わっていると考えるのはごく自然なことである。

では、亀岡盆地と類似した自然環境を有し、さらに開拓神話が伝承されている兵庫県豊岡盆地も、渡来人によって開拓されたのだろうか。また、異なる地域であっても、自然環境が類似していれば、人々の環境知覚にも類似がみられるのだろうか。次節では豊岡盆地を事例に、どのように環境が知覚されていたのかを検討していく。

## 第2節 兵庫県豊岡盆地の開拓神話

兵庫県の北東部、豊岡市を中心に広がる豊岡盆地は半月状の形をした盆地で、北は日本海に面し、周囲は小起伏山地や丘陵に囲まれている。朝来市生野町字円山を発し、狭く蛇行した山間を経て盆地中央を北流する円山川は、古くから暴れ川と呼ばれ、何度も洪水により氾濫している。その円山川などの堆積作用によって形成された豊岡盆地は、縄文時代、黄沼前海と呼ばれる巨大な入り江が広がっていたと推定されている<sup>(12)</sup>。つまり、豊岡盆地も亀岡盆地と同様に、古くは一面水浸し

だったのである。このような災害の起こりやすい自然環境を、豊岡盆地に住む人々ほどのように知覚していたのだろうか。豊岡盆地に伝承される神話をみてみよう。

**伝承③** 昔、新羅の国の王子、天日槍命を乗せた船が但馬の国、気比の村に流れ着いた。そこで天日槍は来日山へ登り、出石村をみつけた。出石の村長は天日槍を温かく迎え入れ、田や畑を分け与え、一緒に暮らし始めた。ある時大雨が降り、一面が泥海となり、人も家も流されてしまった。その様子を見た天日槍は「瀬戸の大岩を切り開いて泥海の水を海へ流そう」と考え、村人と力を合わせて谷を作り、水をせき止め出てきた岩を砕いた。堰を切ると泥水は海へと流れだし、人々は喜び、天日槍を国造りの神として出石神社に祀った<sup>(13)</sup>。

豊岡盆地に住む人々も、洪水の起こりやすい環境を一面泥海であったと知覚していたということが、この神話から読み取ることができる。また、豊岡盆地を開拓した天日槍は新羅の国からやってきたという<sup>(14)</sup>。つまり、但馬一帯を開拓したのは渡来人であったと神話が語っているのである。

**伝承④** 天日槍命と五社大明神の神々<sup>(15)</sup>が瀬戸を切り拓いて大岩を取り除くと、一面にたまっていた泥水が日本海に流れ出した。ところが、泥水の中から大蛇が現れ、瀬戸に横たわり水を堰き止めてしまった。神々は協力して大蛇を頭と尾の両方から引っ張り、真つ二つにちぎって退治した。その日が朔日であったため、この日を八朔と呼ぶようになり、但馬の各地で大蛇に見立てた藁で作った綱を引きあいちぎるようになった。場所によって異なるが、エンタア引きやエント引きともいわれている<sup>(16)</sup>。

伝承④では、天日槍命の他に五社大明神という神々が登場する。詳細は第3章第2節に譲るが、但馬では五社大明神に祀られているのは開拓に携わった渡来人であると伝承されている。また、出石神社付近の袴狭遺跡で「秦」の文字が刻まれた

墨書土器が発掘されていることから<sup>(17)</sup>、但馬の開拓には渡来人が携わっていたと推測することができる。



第4図 豊岡盆地の開拓神話に関する伝承地（筆者作成）

これまで、先学の研究を踏まえながら、神話や考古学の成果に基づいて、亀岡盆地と豊岡盆地の環境知覚について述べてきた。両地域は、周囲を山々に囲まれ、狭く蛇行した場所を川が流れているため、大雨時には災害が起こりやすい場所となる。そのような環境は湖や泥海のようであったと知覚され、地域が異なっても、自然環境が類似していれば、人々の環境知覚も類似するということがわかった。つまり、亀岡盆地や豊岡盆地以外の地域であっても、自然環境が類似している地域であれば、その環境は湖や泥海のようであったと知覚されていたと推測できる。とすれば、その地域で伝承される神話は、亀岡盆地や豊岡盆地と同じ開拓神話の可能性が高いと考えられる。

さて、もう一度、伝承④の神話に注目してみよう。ここまで、亀岡盆地と豊岡盆地の類似点を指摘してきたが、この伝承には明らかな亀岡盆地の開拓神話との相違がみられる。それは、豊岡盆地の開拓神話では、土地の起源だけでなく、祭礼の

起源が語られているということである。さまざまな文献をあたった結果、豊岡盆地の南部に位置する兵庫県養父市八鹿町岩崎でその祭礼が行われていたことがわかった。

### 第3節 兵庫県養父市八鹿町岩崎の伝承

**伝承⑤** 岩崎村の奥の山の上にある大きなくぼ地には大蛇が住んでいた。ある夜のこと、大蛇が老人の夢枕に立ち、近くこの池から出たいと思う。ついては村を通させてくれないか、といった。あくる日、老人が村人達にこの話をすると、人々は気味悪がり、相談の結果、蛇を通さないことに決めた。そして、岩崎村の奥の山を一つ越して、出石に入ったところにある暮坂村に住んでいる蛇好きな男に協力してもらい、池の出口に蛇杭を打ちこんだ。大蛇は怒り悲しみ、自力で脱出を試みた。ある嵐の夜、谷の奥の方で遠雷のような地鳴りが起こった。あくる朝外をみると、谷筋が一面の泥海になっていた。大蛇の池があった辺りは、山肌がざっくりと割れ、池はなくなっていた。この恨みを晴らすため、旧暦8月1日に、長さ50mもある縄をない、これを大蛇にみだてて村中の人々がひき合い、ひきちぎる行事を行うことにした。縄が切れると大蛇を退治したことになり、1日の農休みがもらえることになっていた<sup>(18)</sup>。

八鹿町岩崎に伝わる伝承⑤は、先に挙げた伝承④よりも、さらに詳しく祭礼の起源を説明している。この祭礼を、岩崎に住む古老は祭礼が行われる日が8月1日であることから、「岩崎の八朔」と呼んでいた。八朔とは八月朔日の略で、『民俗学辞典』は、3つの要素を挙げている。1つ目は、豊穰を祈願する祭礼で、九州では田実・作頼み、東北では仮初めの神事が行われている。2つ目は贈り物をし合うという風習で、3つ目は近畿地方一帯に広がる八朔休みであった<sup>(19)</sup>。つまり、一般的な八朔は、豊作を祈願して行われる作頼みや仮初めの神事で、藁蛇や綱引きなどの大蛇退治的要素は含まれていないのである。では、岩崎の八朔のように藁蛇や綱引きが関係している八朔は、全国に何例ほど分布しているのだろうか。次の章

では、八朔について述べていく。

## 第2章 八朔の文化地理学

### 第1節 八朔

『日本祭礼地図Ⅲ 秋季編』によると、旧暦8月1日（新暦9月1日）に行われる八朔は、少なくとも、全国226箇所にも上ることがわかった。八朔の呼称は地域によってさまざまで、八朔祭・風祭・二百十日・田面・田実・獅子舞・例祭・憑の行事・八朔節供・風鎮祭・お籠りなどと呼ばれている。また、祭礼の内容も地域によってさまざまで、大別すると以下の7つに分けることができる<sup>(20)</sup>。

表1 八朔の祭礼・内容別一覧（筆者作成）

	分類	最も多く行われている地方
1	踊りの奉納	九州地方、特に佐賀県。
2	獅子舞の奉納	関東地方、特に東京都。
3	相撲	関東地方、特に東京都。
4	神輿渡御	中部地方、特に石川県。
5	おこもり	九州地方。
6	神楽の奉納	東北地方。
7	その他	

祭礼の内容として最も多くみられたのは例祭に伴う踊りの奉納で、特に九州地方に集中していた。また、獅子舞の奉納や相撲なども多くみられた。最も八朔が行われている都道府県は、福島県と岐阜県でともに12箇所であった。反対に、北海道・青森県・愛知県・岡山県・高知県・大分県・宮崎県では行われていなかった。地方別に分類すると、東北地方26箇所、関東地方48箇所、中部地方45箇所、近畿地方39箇所、中国地方21箇所、四国地方14箇所、九州地方33箇所と、関東地方が最も多く、四国地方が最も少ないという結果になった。全国226箇所のうち、藁蛇や綱引きが関連していた祭礼は、鳥取県米子市淀江町福岡上流で行われる上流の八朔綱引き、1例のみであった。この非常に珍しい藁蛇の八朔について、さらにさまざまな文献をあたったところ、全国7箇所で作承されていることが判明した。

### 第2節 藁蛇の八朔の事例

#### 1) 兵庫県養父市八鹿町岩崎「岩崎の八朔」

兵庫県養父市の北東部に位置する岩崎は、東は山を隔てて豊岡市出石町に接している。集落は大江川の支流である岩崎川流域に点在し、かつては米作りを中心に焼畑農業や綿・藍などの栽培が行われていたが、現在主だった農業は行われていない。岩崎村の初出は鎌倉時代で、はじめ但馬国養父郡大恵保の一村であったが、江戸時代になると独立し、明治22年伊佐村、昭和30年八鹿町の大字を経て、現在に至る<sup>(21)</sup>。鎌倉時代より以前の歴史は不明だが、山ぎわに沿って3基の古墳が残存していることから、古墳時代においてはこの辺りで生活が営まれていたと考えられる<sup>(22)</sup>。



第5図 兵庫県養父市八鹿町岩崎周辺図（筆者作成）

9月1日（昔は旧暦8月1日）、子供達が稲藁で長さ約50mの大蛇を作成し、但馬五社を祀る五社神社の前で綱引きを行う。少子化などの影響により廃止されたため、現在は行われていないが、綱が切れると大蛇を退治したことになり、1日農休みがもたらえたという。祭礼の起源は不明だが、由来は第2章第3節で紹介した岩崎に伝わる大蛇伝説の故事による<sup>(23)</sup>。

第2章第2節で述べたように、周囲を山々に囲まれ、狭く蛇行した地形を河川が流れる環境は、災害が起こりやすい地域である。岩崎は集落が谷筋に位置し、川の上流部にあたることから、災害が起こりやすい地域であるといえる。そのような環境を、人々はどのように知覚していたのだろうか。古老から聞いた話を紹介する。

伝承⑥ かつて、この辺一帯は沼地であった。最初に但馬に渡ってきたのはヒコホロロノカミで、土木工事に優れていた。ヒコホロロノカミは城崎にある運河を作り、地元の豪族の娘と結婚して、絹巻神社に葬られた。その子孫が小田井縣神社に祀られている。それから、小田井縣神社の子孫は出石神社、出石神社の子孫は養父神社に祀られ、最後に養父神社の子孫が粟鹿神社に祀られた。この五社を合わせて但馬五社と呼び、但馬五社を祀っているのが岩崎村の五社神社である。但馬五社に祀られているのは渡来人の子孫であるから、地元では仏さんと呼んでいる。

先に紹介した伝承③・④とは異なる開拓を語るこの伝承は、豊岡市だけでなく、養父市八鹿町の辺りもかつては沼地で、その沼地は渡来人によって開拓されたと説明している。つまり、岩崎の人々も、災害が起りやすい環境を、沼地であったと知覚していたのである。

## 2) 京都府舞鶴市旧池内村内「エトンビキ」

旧池内村とは、京都府舞鶴市の南部に位置していた、明治22年から昭和11年までの村名である<sup>(24)</sup>。池内村の最も下にあたる舞鶴市今田の西南山麓で、上殿古墳と呼ばれる横穴式石室をもつ円墳が発見されていることから、古墳時代にはこの辺りで生活が営まれていたと推測される。『郷土史「我が郷土」池内』によると、旧池内村の9カ字のうち、3カ字で八朔が行われていたとされるが、別所に住む古老の話によると、かつては旧池内村全体で八朔が行われていたという。したがって、現在池内村という行政区画は存在しないが、本論文では3つの事例を旧池内村の事例として1項にまとめて紹介する。

1つ目の事例は、旧池内村の中央からやや西よりに位置する布敷のエトンビキ<sup>(25)</sup>である。中央を池内川が西流し、集落は右岸に集中している。平地では米・麦・豆類・野菜、傾斜地では甘藷・馬鈴薯などの栽培が行われている<sup>(26)</sup>。布敷のエトンビキは、『郷土史「我が郷土」池内』の年中行事の項に祭礼名と日付が記載されている



第6図 京都府舞鶴市旧池内村周辺図(筆者作成)

のみであるため、詳細は不明である。

2つ目の事例は、旧池内村の中央に位置する別所のエトンビキである。布敷と同じく、中央を池内川が西流し、集落は右岸に集中している。左岸に広がる耕地では、米・麦・豆類・野菜などが作られ、傾斜地では甘藷・馬鈴薯などの栽培が行われている<sup>(27)</sup>。

9月1日、小学生の男子を主体にエトンビキが行われていたが、少子化などの影響により2013年に廃止された。前日、もち米の藁で約12mのジャを作成する。頭はサンダワラ2個、ナスビで目玉、ハラで舌、トンガラシで牙を作り、ミノグサの髪をたらし、榊と御幣を頭に挿す。当日、藁蛇を担いで集落内を練り歩き、頭を噛んでまわる。全戸まわり終えると、公民館裏手にある山へ行き、巨木の根元に藁蛇を巻きつけて終了する<sup>(28)</sup>。祭礼の起源や由来は不明である。

3つ目の事例は、旧池内村の中央からやや東よりに位置する上根のエトンビキである。中央を池内川支流の寺田川が西流し、集落は北部山裾に集中している。作物は布敷や別所と同じであるが、上根では養蚕や薪炭などの製造も行っている<sup>(29)</sup>。9月1日、少年団を主体にエトンビキが行われていたが、少子化などの影響により廃止され、現在は行われていない。前日、稲藁とススキとキビを3つ編みにして約3mの蛇を作成する。頭部はサンダワラ2個、目玉はナスビとホオズキ、舌はバラ、牙は唐辛子で、尻には必ず青い稲穂をまぜて縋い挙げる。当日、上から下へ練り歩き、全戸まわり終えると、池内川左岸にある山の神の小祠の左横に藁蛇を奉納して終了する<sup>(30)</sup>。祭礼の起

源や由来は不明である。

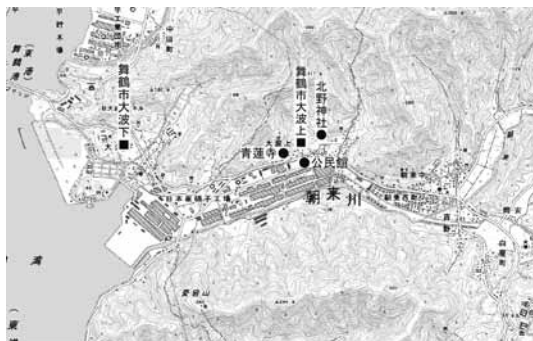
旧池内村の自然環境は、山間に集落が位置し、狭く蛇行した地形を川が流れていることから、災害が起こりやすい地域である。このような環境を、人々はどのように知覚していたのだろうか。池内村の起源を語る伝承を紹介する。

**伝承⑦** 土砂崩れが起き別所と布敷の境の五老の滝を堰き止めてしまった。大雨が降り続き別所から奥に大きな池が出来たため、山に家を建て、池の中央にあった大きな岩に船を繋いで暮らした。いつからか大蛇が池に住みつき村を荒らし始めた。村人達は大蛇を殺したが、祟りを恐れて池の中央の岩に弁財天を祀って、大蛇の呪いを鎮めた。池はかれて今の池内村が出来たが、其の時弁財天を祀った岩をベダイ様と呼んでいる<sup>(31)</sup>。

伝承によると、土砂崩れにより別所と布敷の境にある五老の滝がせき止められたことから大きな池が出現し、その後、池内村が成立したという<sup>(32)</sup>。つまり、池内村の人々も、災害が起こりやすい環境を、池のようであると知覚していたことが、伝承⑦から読み取れる。

### 3) 京都府舞鶴市大波上「悪魔払い」

大波上は、京都府舞鶴市の東部、舞鶴湾近くに立地している。



第7図 京都府舞鶴市大波上周辺図（筆者作成）

南を朝来川が流れ、朝来谷の北側山麓周辺には集落や朝来古墳群などが広がっている。古くは米作り中心の農業が行われていたが、太平洋戦争時の工場建設に伴い、全ての田が埋め立てられたた

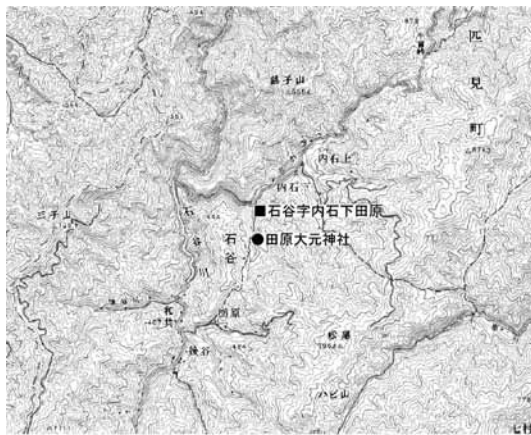
め、現在は兼業農家による畑作が主流となっている。大波上の初出は江戸時代で、はじめ丹後国加佐郡大波村、江戸時代末期に大波上村と大波下村の2つに分村し、明治22年朝来村、昭和18年舞鶴市の大字となり、現在に至る<sup>(33)</sup>。

9月1日（昔は旧暦8月1日）、小学生の男子を主体に悪魔払いが行われる。公民館に集まり、稲藁で約2mのジャを作成する。目玉はナスビ、牙はトウガラシを用いる。以前は女性を追いかけまわして下半身に藁蛇をぶつけたといい、その名残から、現在も胴体の至る所にカヤの木の枝を挿している。完成後、藁蛇を担いで集落内を練り歩き、全戸まわり終えると、青連寺参道口にある大乘妙典一石一字塔に藁蛇を奉納して終了する。祭礼の起源や由来は不明だが、『朝来村史』によると、悪魔払いは大波上村が大波村であったころから行われているとされるが、現在確認できるのは大波上のみである<sup>(34)</sup>。

大波上の自然環境は、これまで紹介した岩崎や池内と同じく、災害が起こりやすい環境であるが、神話や渡来人などの要素は認められなかった。

### 4) 島根県益田市匹見町石谷字内石下田原「藁蛇神事」

匹見町は島根県の西部に位置し、西は鹿足郡津和野町日原に接している。



第8図 島根県益田市匹見町石谷周辺図（筆者作成）

中国山地を源流とする匹見川のほか、その支流である広見川、紙祖川、石谷川などの河川が町内を流れる。匹見町の歴史は、道川地区の新楨原遺

跡で先土器時代の層が確認されたことから、旧石器時代にまで遡ることができる<sup>(35)</sup>。古墳時代については、数基の円墳が残存するのみであるが、和又杜山古墳で7世紀頃の唐鋤が発見されたことから、朝鮮との関連が推測される<sup>(36)</sup>。また、古代匹見町が属していた石見国美濃郡山田郷は、漢族山田氏の移住先であったことから、渡来人との関連をみることができる<sup>(37)</sup>。

匹見町の南西部に位置する内石下田原は、内石川の支流である田原川流域に集落が点在している。古くは蕎麥・椎茸・谷山葵などの栽培が行われていたが、現在は2戸のみの過疎地であるため、主だった農業は行われていない。

9月3日（昔は旧暦8月1日）、天御中主神を祀る田原大元神社<sup>(38)</sup>で、五穀豊穰や雨乞いを祈願して藁蛇神事が行われる。早朝、3つ組の稲藁を左巻きに編んで長さ約5m、太さ約15cmの大蛇を作成する。完成後、藁蛇は本殿に奉納され、



写真1 藁蛇（筆者撮影）

祝詞奏上や榊奉納が行われる。その後、藁蛇を社殿背後の古椿の御神木に巻きつけ、頭部に一本の幣を刺して神事は終了する。祭礼の由来は不明だが、『匹見町誌 現代編』に、「同神社は明治13年（1880）、鹿足郡内にあったという御殿村（現在地不明）から御神体を移して建立された。それ以来毎年八月の祭りの日に、地区の人たちによって神事が執り行われてきた<sup>(39)</sup>」とあり、大元神社を勧請した際、祭礼が伝わったとされる<sup>(40)</sup>。

これまでの事例同様に、田原も谷筋に集落が位置し、狭く蛇行した地形を川が流れているため、災害が起こりやすい場所である。このような環境を、人々はどのように知覚していたのか。匹見町に伝承される開拓神話をみてみよう。

**伝承⑧** 山田郷の上古は、人類の住居もきわめて少なく、唯原始林は、熊・鹿・猪・猿等野獣の、張梁に任せていた。このころ八雲立つ出雲を震動させていた、八岐の大蛇が時々中国山地の密林をくぐり、廻遊してこの地を襲い地民に危害を与えるので、これが悩みの種となっていた。しかるに天照大神の御弟、素戔鳴尊の力によって、大蛇はなんなく簸ノ川上において、退治されたので、住民ははじめて安堵の面持ちをした。[……] 大昔この辺には大蛇が棲んでいたため、巨大な池が出来たのであった。後世大蛇を失ったこの池は、次第に水が涸れて、原となったので、池の音に千をあてて、この地を千原と云うようになった。しかしこの辺は、山間の僻地であったので、自然山田と呼んでいたのが、いつの間にか山田郷の、郷名となったのである<sup>(41)</sup>。

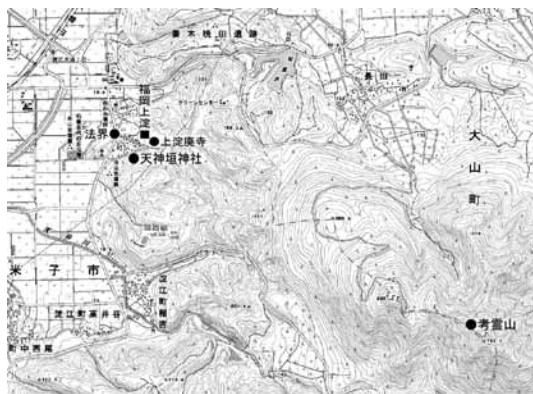
神話によると、山田郷にはかつて巨大な池があったという。つまり、匹見町一帯に住んでいた人々も、災害が起こりやすい環境を、池のようであると知覚していたのである。また、開拓神話が伝承されているだけでなく、朝鮮との関連が指摘されているため、渡来人によって開拓が行われたと考えることが可能である。

5) 鳥取県米子市淀江町福岡上淀「上淀の八朔綱引き」



淀江町は鳥取県の北西部に位置し、西伯郡大山町に接している。

大山を水源とする佐陀川や宇田川のほか、その支流である天井川などの河川が町内を流れる。先



第9図 鳥取県米子市淀江町周辺図(筆者作成)

史時代、淀江平野は大きな入り江であった<sup>(42)</sup>。この淀江湾内に位置する中西尾からサヌカイト製の尖頭器や縄文早期末から前期初めの土器が出土していることや、福岡・稲吉で石器が出土していることから、これらの場所では縄文時代初期には縄文人による生活が営まれていたとされる<sup>(43)</sup>。また、稲吉の角田遺跡から家や船の線刻絵画のある弥生時代中期の土器片<sup>(44)</sup>が出土していることや、福岡で本州唯一の石馬<sup>(45)</sup>が出土していることから、淀江港を中心に朝鮮半島との交易が盛んに行われていたのではないかと推測されている<sup>(46)</sup>。

考霊山北西麓に広がる福岡は、淀江町の北東部に位置している。丘陵上には多くの古墳群が存在し、字上ノ山の天神垣神社裏山には町内最古の古墳があり<sup>(47)</sup>、字桜田には奈良時代に建立された上淀廃寺の跡がある。また、上淀は近世の初めごろまで大山寺領<sup>(48)</sup>であったとされ、大山寺中興の祖といわれる豪円僧正は上淀の出身といわれる<sup>(49)</sup>。

9月の第1日曜日(昔は旧暦8月1日)、少名毘古那命を祀る天神垣神社<sup>(50)</sup>で、クチナワとよばれる長さ約45mの大蛇を、藁を3つ編みにして作成する<sup>(51)</sup>。頭部にある5つの印は、上から順に公家・目玉・鼻の穴を表している。必ず白いむくげの花を挿さなければならないとされ、このことから、クチナワの性別は女性だといわれる。

完成すると、藁蛇を担いで境内の荒神の周りを3回まわる。まわり終えると、頭部を荒神の灯籠の上に安置し、胴体を集落の中心である縦小路に運び、上と下に分かれて3回綱引きを行う。この時、下が勝れば豊作、上が勝れば凶作だといわれる。綱引き後、胴体を村境の法界さんまで運び、とぐろを巻いた状態で安置して終了する。祭礼の起源や由来は不明だが、『淀江町誌』によると、八朔綱引きはもと汗入郡で1000石の地領をもっていた上淀と国信(現・西伯郡大山町国信)でのみ行われていたとされるが、現在確認できるのは上淀のみである。

上淀の自然環境は、これまでの事例と多少相違があるものの、山裾に集落が位置しているため、災害が起こりやすい地域といえる。このような環境を、人々はどのように知覚していたのか。淀江町に伝わる考霊山の起源伝承から紐解いてみる。  
**伝承⑨** 大昔、商売のためにこの地へやってきた高麗の国の人々が淀江の海岸で大山をみている



写真2 クチナワさん(筆者撮影)

と、漁師にこんなに高い山はお前の国にないだろうと自慢された。腹が立った商人はからの国で一番高い山を船で引っぱってきて浜に据え付けた。どちらも高かったので天の神様に山比べをお願いした。天の神様は長井桶を大山とからの国の山の頂に掛け、樋の真中に手桶の水を流すと、水はからの国の山の方に流れた。これを見た商人は山を置き去りにして逃げてしまった。置き去りにされた山は、からの国から持って来たので、から山と呼ばれている<sup>(52)</sup>。

『出雲国風土記』の国引き神話を思わせるこの伝承は、一見、考霊山の起源を説明しているだけのように取れるが、上淀は考霊山麓に広がる地域であることから、上淀地域の開拓を説明しているとも解釈することができる。文言として、どのように環境が知覚されていたのかということは表現されていないが、第2章第2節で、自然環境が類似する地域であれば、その環境は湖や泥海のようにだと知覚されていたと推測できると述べた。このことから、亀岡盆地や豊岡盆地と自然環境が類似している上淀は、湖や泥海のようであったと知覚されていたと考えることができる。その証拠に、淀江町一帯はかつて入り江が広がっていたとされ、人々の環境知覚と科学的根拠が一致していることがわかる。また、高麗の国ということは、淀江町にやってきた人物は渡来人である。伝承に登場するだけでなく、大陸との交流を示す石馬が福岡で出土していることから、渡来人との関連がうかがえる。

さて、本節では、自然環境・祭礼の内容・神話などの観点から、藁蛇の八朔の事例を7つ紹介した。次節では、7つの事例を整理しながら比較を行い、わかることを述べていく。

### 第3節 事例の比較

まず、7つの事例を地形図に落としてみると、全ての地域が日本海に面し、山陰地方に含まれていることがわかる。(第10図)次に、共通点を書き出してみる。



第10図

- ①9月1日(昔は旧暦8月1日)に祭礼が行われる。
- ②祭礼の大筋は同じで、藁蛇を作成して、最後はどこかに奉納する。
- ③開拓神話が語られている。(事例3以外)
- ④渡来人や朝鮮との関わりがみられる。(事例2・3以外)
- ⑤谷筋や山間に位置する小規模集落で、周囲を山々に囲まれ、狭く蛇行した地形を川が流れているため、災害が起こりやすい地域である。
- ⑥神話によると、人々は災害が起こりやすい環境を、湖や泥海のようであったと知覚している。また、考古学の成果ともある程度的一致がみられる。

このように、文化を地形図に落とし、環境や歴史や祭礼や神話など、さまざまな観点から検討することで、藁蛇の八朔にはある程度のまとまりがみられることが明らかになった。しかしながら、京都府舞鶴市の事例のみ、他と異なる点が複数認められた。1つ目は、祭礼の内容である。先に挙げた7つの事例の祭礼の内容を簡略にまとめたのが、以下の表である(表2)。

事例1・4・5の祭礼は神社で行われているのに対し、事例2・3の祭礼は子供を主体に集落全体で行われているため、舞鶴市の八朔は祭礼の要素よりも、年中行事的な意味合いが強いと考えられる。また、藁蛇を担いで集落内を巡行した後、特定の場所に藁蛇を安置している所作から、藁で出来た作物に集落内の災厄を移し村境に捨てる虫

	御利益	実施場所	起 源	祭礼の内容
事例1 (兵庫県)	大蛇退治	五社神社	大蛇への恨みを晴らすため	子供が主体。藁蛇を作成し、綱引きを行う。綱を切ることが目的とされる。
事例2・3 (京都府)	厄払い	集落内	不明	子供が主体。藁蛇を作成し、集落内を巡行した後、特定の場所に安置する。
事例4 (鳥根県)	五穀豊穡	大元神社	神社から伝承された	藁蛇を作成し、社殿背後の古椿の神木に巻きつける。
事例5 (鳥取県)	五穀豊穡	天神垣神社	寺から伝承された	藁蛇を作成し、綱引きを行う。頭は荒神、胴は村境に安置する。

表2 祭礼の内容・簡略一覧（筆者作成）

送りや、村境に藁で出来た作り物を掲げることで災厄の侵入を防ぐ道切り行事的な要素が含まれていることがわかる。以上のことから、舞鶴市の八朔のみ形式が異なっているのは明白である。2つ目は、大陸や渡来人との関連が認められないということである。改めていうまでもないが、大陸との交流は船を通して行われていた。だとすれば、大陸に接している日本海沿いは交流に適した場所であり、大きな湾が広がる舞鶴市で大陸との交流が行われていても何ら不思議はない。にもかかわらず、なぜ、舞鶴市の旧池内地区や大波上に、大陸や渡来人などの痕跡が残っていないのか。また、舞鶴市の八朔のみ、形式が異なるのか。それは、藁蛇の八朔などの文化が、舞鶴市を中心に広がったからではないかと考えられる。

#### 第4節 藁蛇の八朔の文化伝播

なぜ地域によって文化が異なるのかという問題を解明するために、これまでさまざまな研究がなされてきた。最初は、文化は段階によって進化するので、地域差が見られるのは進化段階の差であるとする文化進化論や、自然環境が文化の発生に大きな影響を与えているとする環境決定論などの理論が流行し、文化はどのような地域でも自然的に発生すると考えられていた<sup>(53)</sup>。しかし、研究が進むにつれて、文化の発生は「その地域に発生したものは非常に少なく、過去のある時に別の場所で発生したイノベーションが地域を越えて伝わった結果であるものがほとんどである<sup>(54)</sup>」と考えられるようになった。このように文化が地域的に拡大する現象を、文化地理学では文化伝播と呼んでいる<sup>(55)</sup>。文化伝播の類型はさまざまであるが、舞鶴市の事例は、拡大伝播と移転伝播に当てはめて考えることができる。

1つの場所から他の場所に文化が拡大する拡大伝播には、接触性拡大伝播と階層性拡大伝播がある<sup>(56)</sup>。接触性拡大伝播は、伝染病のように直接的な接触によって拡大し、発祥地を中心に波紋のような広がりを見せる<sup>(57)</sup>。この考え方は民俗学にも応用されている。民俗学者の柳田國男は『蝸牛考』において、蝸牛の呼称が、京都を中心に東西へ向けて、デテムシ・マイマイ・カタツムリ・ツブリ・ナメクジの順に同心円状に分布していることを発見した<sup>(58)</sup>。そして、言葉は文化の中心地で発生し、徐々に地方へ波紋のように伝播していくとする方言圏論を提唱した。その特徴は、発生が古い言葉ほど外縁にみられるというものである。文化の中心地である京都では常に新しい言葉が発生し、それは同心円状に周囲へと伝播していくが、その間にも京都では新しい言葉が発生するため、中心地から古い言葉が失われていくのである。この説によると、近畿地方のデテムシが最も新しく、同心円状の端にあたるナメクジが最も古いとされる。また、1991年に朝日放送の番組でアホとバカの境界線を探るために行われたアホ・バカ分布の調査では、アホが近畿地方に分布しているのに対し、バカは近畿地方を除いた全国各地に広がっていることから、アホが最も新しい言葉であることが明らかになった<sup>(59)</sup>。

さて、筆者は第3節の最後に、藁蛇の八朔などの文化は、舞鶴市を中心に広がっていったのではないかと述べた。その根拠は、柳田の方言圏論である。言葉だけではなく、文化も同じように、中心から周辺に向かって伝播していったのではないだろうか。舞鶴市の八朔に年中行事的な要素が多く含まれていることは先に述べたが、他の事例は年中行事ではなく、祭礼として機能している。なかでも、鳥根県の事例は儀礼的で、藁蛇の作成

と神事のみが行われる。ゆえに、7つの事例のなかで最も古い形式を保っているのは、鳥根県の八朔であると考えられる。それを裏付ける理論として、最も古い形式は周縁部に分布するという柳田の方言圏論が挙げられる。舞鶴市を中心に藁蛇の文化が同心円状に伝播していったと仮定すると、鳥根県は最も周縁部にあたり、先の推測と一致する。また、兵庫県・鳥根県・鳥取県の八朔の内容はある程度一致しているのに対し、京都府の八朔のみ内容に相違がみられるのは、古い文化は中心地に残らない場合があるという方言圏論の特徴に一致し、舞鶴市が文化の中心地であったことを裏付けている（第11図）。



第11図

では、なぜ舞鶴市に藁蛇の八朔という文化が存在していたのだろうか。先にも述べたように、文化は自然的に発生するよりも、発祥地から伝播された場合がほとんどであるとされ、それは藁蛇の八朔も同様だと考えられる。そこで、注目すべきは、藁蛇の八朔が行われている地域では、開拓神話が伝承されているということである。佐々木高弘は『神話の風景』のなかで、創造神話、すなわち開拓神話が語られる状況を、人は見知らぬ土地へ入ると自己のルーツを失い混乱に陥るが、新しい秩序を創造することで新しい環境に適応しようとしたと述べている<sup>(60)</sup>。つまり、開拓神話は古い土地から新しい土地へ移住する際に語られるのである。現在、舞鶴市に開拓神話の痕跡は見受けられないが、最も古い文化が残っているとされる鳥根県では開拓神話が語られている。その開拓神

話を語った人々は、各地に痕跡を残している大陸からやってきた渡来人だったのではないだろうか。文化地理学では、ある文化特性を持つ個人、あるいは集団が、新しい居住地に移住した際に発生する伝播過程を移転伝播と呼ぶ<sup>(61)</sup>。つまり、藁蛇の八朔は、元々は大陸で行われていた祭礼であったが、何らかの理由で大陸から舞鶴市に移住してきた渡来人によって伝播されたということである。渡来人が舞鶴市に移住したのであれば痕跡が残っていてもおかしくはないが、舞鶴市のみ大陸との関連が指摘されていないのは、これまで何度も述べてきたように、文化の中心地では新しい文化が発生し続けるため、古い文化が残らず消えてしまったと考えられる。または、再び移転伝播が行われ、別の地域に渡来人の集団が移動したために、痕跡が残されていないと考えることも可能である。

本章では、7つの事例の比較や地図化を行い、文化伝播の視点から考察することで、藁蛇の八朔の拡散ルートを明らかにした。しかしながら、ここで1つ疑問が生じた。なぜ、亀岡盆地では藁蛇の八朔が行われていないのだろうか。ここまで、開拓神話と藁蛇の八朔は、あくまでも別々の事例として取り上げてきたが、第2章第3節で挙げた藁蛇の八朔の特徴に、亀岡盆地はほとんど当てはまっている。にもかかわらず、藁蛇の八朔だけでなく、八朔の祭礼そのものが亀岡盆地では行われていない。しかし、現在行われていないからといって、過去にも行われていなかったとは限らない。そこで、第3章では、藁蛇そのものに焦点をあて、祭礼の痕跡を探る。

### 第3章 開拓神話と藁蛇の祭礼

#### 第1節 藁蛇に関する祭礼

藁蛇の祭礼は、全国さまざまな場所で行われている。規模にこだわらなければ相当数の事例が挙げられるが、本論文では複数の文献に記載され、なおかつ、祭礼の内容がある程度わかっている62例を取り上げる（資料1参照）。まず、祭礼の分布図を作成した（第12図）。西日本、特に中国地方と近畿地方に集中していることがわかる。次いで多いのは関東地方で、特に千葉県に集中して



第12図

いる。また、比較的、日本海に面している地域が多いことがわかった。最も祭礼が行われている都道府県は京都府の11例で、反対に北海道・沖縄県・四国地方・新潟県と石川県を除く中部地方では行われていなかった。祭礼の内容は地域や時期によってさまざまであるが、大別すると以下の8

つにわけることができる(表3)。

次に、月別に祭礼をみてみると、最も祭礼が行われている月は18例の1月で、正月に関する祭礼が多く見受けられた(表4)。最も少ない月は4月・7月・10月・12月で、周期が約3か月ごとであるから、季節の変わり目には空白期間が設けられていたということだろうか。祭礼の内容として最も多いのは、62例中28例の道切りで、1月に集中しているが、1年を通して各地で行われている。次いで多いのは、62例中7例の綱引きだが、綱引きが行われているのは、兵庫県・大阪府・鳥取県・奈良県・宮崎県・熊本県の西日本のみで、東日本では行われていない。また、第3章で述べた藁蛇の八朔が行われる9月は、先に紹介した7つの事例のみであった。以上をまとめると、藁蛇に関する祭礼は、西日本に多く分布し、最も行われているのは道切りで、1月に集中しているということがわかった。

ところで、藁蛇に関する祭礼の特徴は、時期は異なるものの、藁蛇の八朔の特徴とほぼ一致して

	分類	数	内容
1	道切り	29例	藁蛇作成後、村境に藁蛇を安置する。
2	奉納	6例	藁蛇作成後、神社に藁蛇を奉納する。
3	綱引き	6例	綱を藁蛇に見立てて綱引きを行う。
4	弓	4例	弓に関する神事を行う。
5	盆綱	4例	お盆に藁蛇を作成し、集落を巡行後、藁蛇を川に流す。
6	注連縄	2例	注連縄を作り、昨年のもとの掛け替える。
7	虫送り	2例	虫(藁蛇)作成後、村外れなどに虫を安置する。
8	その他	9例	

表3 藁蛇に関する祭礼・内容一覧(筆者作成)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
道切り	9例	4例	1例	0例	2例	3例	0例	2例	4例	0例	2例	1例	28例
奉納	1例	1例	1例	0例	1例	0例	0例	0例	1例	0例	1例	0例	6例
綱引き	3例	0例	0例	0例	0例	1例	0例	1例	2例	0例	0例	0例	7例
弓	3例	0例	0例	1例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	4例
盆綱	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	4例	0例	0例	0例	0例	4例
注連縄	0例	0例	1例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	1例	0例	2例
虫送り	0例	0例	0例	0例	1例	1例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	2例
その他	2例	0例	1例	0例	2例	0例	1例	2例	0例	1例	0例	0例	9例
合計	18例	5例	4例	1例	6例	5例	1例	9例	7例	1例	4例	1例	

表4 藁蛇に関する祭礼・月別一覧(筆者作成)

いる。では、藁蛇の八朔の特徴にみられた開拓神話や自然環境などの要素も一致しているのだろうか。周囲を山々に囲まれ、川が狭く蛇行した地形を流れる地域は、62例中47例と多く、藁蛇の八朔の特徴と一致しているといえる。開拓神話や大蛇に関する伝承が語られていた地域は62例中21例と少数であったが、まとまった数が確認出来ることから、これも藁蛇の八朔の特徴と一致しているといえる。これらのことから、藁蛇の八朔と藁蛇に関する祭礼には何らかの関係性があると推測されるが、どちらの祭礼も亀岡盆地との関連性がみられなかったため、本論文では関係性を指摘するにとどめておく。

さて、本節では、亀岡盆地で行われていたとされる藁蛇の八朔の痕跡を追究するため、藁蛇に関する祭礼の検証を行ったが、亀岡盆地の祭礼に藁蛇の要素が含まれている事例は1つも見つけることはできなかった。ところが、亀岡盆地を開拓した神を祀る鉾山神社の例祭・亀岡祭では、かつて、大蛇の血が描かれた山車を使用していたことがわかった。

## 第2節 亀岡祭と蛇

丹波の祇園祭とも呼ばれる亀岡祭は、毎年10月に京都府亀岡市の鉾山神社で行われる秋の例祭である。祇園祭と同様に1カ月を通して行われるが、特に有名なのは10月25日に行われる山鉾巡行だろう。現在、各山鉾町では11基の山鉾が保存されている。『新修亀岡市史 資料編第5巻』に



第13図 檣舟の図

(注62『新修亀岡市史 資料編第5巻』622頁より)

よると、いつ山鉾が出現したのか定かではないが、18世紀末には11基の山鉾が出そろっていたという。しかし、その形態は流動的で、現在の山鉾に固定されたのは、江戸時代末期と推測されている<sup>(62)</sup>。では、それ以前の亀岡祭にはどのような山鉾が出されていたのだろうか。寛政11年(1799)に記された「矢田祠記別録下書坤」をみると、今はない山鉾の原型とされる舟鉾の姿があった<sup>(63)</sup>。(第13図)ここで、舟鉾に関する伝承を紹介する。

**伝承⑩** 亀岡は大昔湖で、亀山城址の辺りは島であつた。大國主命が檣田村字田能に祀ってある檣船神社から船を借りてこの湖を切り開かれた際、湖中に大蛇が棲んでいたで、命はそれをお平げになって無事に亀岡の地を開拓されたといわれている。亀岡町の氏神である鉾山神社の例祭に出る山車の一つが、舟を型どったもので、面もその舟の下部に水が飛び散って居る様が描いてあって、その水玉が青色と赤色とに塗ってあるのは、如上の伝説に根拠を置くもので、赤色は即ち大蛇の血を表すものである<sup>(64)</sup>。

伝承によると、舟鉾の下部にある赤い浪幕は大蛇の血を表しているとされ、大國主命が亀岡盆地を開拓する際に、湖から現れた大蛇を退治したことに起因する。この舟鉾の下部に大蛇の血が描かれていたことこそが、亀岡盆地で藁蛇に関する祭礼が行われていたことを示唆している。

## 終章 むすびにかえて

本論文は、全国7箇所伝承されている藁蛇の八朔という祭礼の伝播ルート、すなわち祭礼の起源を明らかにすることを目的とし、文化地理学の視点から述べてきた。その結果、藁蛇の八朔という文化は京都府舞鶴市を中心に、周辺に向かって同心円状に伝播していったという1つの結論が導き出された。また、祭礼が行われる7つの地域に共通している①開拓神話が語られている、②大陸との関係が指摘されている、などの点から、祭礼を舞鶴市に持ち込んだ文化集団は、大陸から移住してきた渡来人であったと推定した。しかしなが

ら、祭礼を研究対象としているにもかかわらず、祭神や祭礼の内容の差異などについては触れていないため、十分な検証とは言い難い。反省すべき点である。

さて、序章でも述べたが、本研究の真の目的は、神話と祭礼が密接に関連しているということを明らかにすることである。筆者は、祭礼のルーツには神話が起因していると考えている。それを裏付ける第一段階として、本論文で開拓神話と藁蛇の八朔を取り上げた。すると、開拓神話が伝承される地域と、藁蛇の八朔が行われる地域には、共通点が多くみられることがわかった。その主な特徴として、地形が挙げられる。両地域の自然環境は、周囲を山々に囲まれ、狭く蛇行した地形を川が流れる災害の起こりやすい地形である。そのような環境を克服するために語られたのが開拓神話だったのではないだろうか。開拓神話が新しい土地に移住した際に語られる神話であることは先にも述べたが、その多くは大陸から移住してきた渡来人によって語られたものであり、その際、藁蛇の八朔という祭礼が持ち込まれたと推測される。なぜなら、現在八朔が行われている地域は災害が起こりやすい地形であることから、八朔の意義は自然環境を支配するためであったと考えられる。本来、祭礼とは豊作祈願や神々への感謝を示すために行われるものであった。生きていく上で作物を育てることは最も重要なことだったからである。しかし、技術が発達するまでは、自分たちで環境を支配することが出来ないため、災害の被害に合いやすく、呪術的なものに頼るほかなかった。それが祭礼である。しかし、技術が発達すると、自分たちで環境を支配出来るようになるため、呪術的な意味での祭礼を行う必要はなくなった。そのため、藁蛇の八朔は大きな盆地や平地では見られない。それが、亀岡盆地で藁蛇の八朔が行われていない理由である。

佐々木高弘は『民話の地理学』で、「伝説は変容するものなのだが、一貫して変わらないものがある。それは場所である。」と述べ、場所の重要性を指摘している<sup>(65)</sup>。以上のことから、一見、ばらばらに見えるものでも、場所という繋がりでみれば、それが神話と祭礼であっても密接に関係しているということが、本論文により確認された。

〔注〕

- (1) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003、92頁。
- (2) Yi-Fu Tuan, *Perceptual and Cultural Geography: A Commentary*, *Annals of the Association of American Geographer*, 93-4, 2003, p878-881.
- (3) 佐々木高弘「伝承された洪水とその後の景観：カオスからコスモスへ」『京都歴史災害研究』第3号、立命館大学COE推進機構立命館大学歴史都市防災研究センター京都歴史災害研究会、2005、21-31頁。
- (4) このような神話を、建築史を研究する田中充子は「蹴裂伝説」と呼び、その発祥は神宮皇后の裂田溝（福岡県）でないかと述べている。（田中充子「『裂田溝』はいかにつくられたか：蹴裂伝説と国づくり その4」『京都精華大学紀要』第32号、2007、2-21頁。）
- (5) 桂川は場所によって名称が異なり、亀岡盆地内では大堰川、保津町請田から京都市嵐山までの間は保津川の名で親しまれている。桂川が大堰川と呼ばれる由縁は、古代に渡来人である秦氏の一族が、現在の嵐山渡月橋付近に農業用の大堰を築いたことによるとされる。（亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』本文編第1巻、京都府亀岡市、1995、49頁。）
- (6) 前掲注3、24-26頁。
- (7) 田中勝雄「動植物と社寺に関する伝説：南桑民譚雑録三」『旅と伝説』第9年第12号、三元社、1936、45～46頁。
- (8) 亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』本文編第1巻、京都府亀岡市、1995、56-57頁。
- (9) 前掲注3、24頁。
- (10) 前掲注8、358-359頁。
- (11) 亀岡市神職会・亀岡市氏子総代会編『亀岡神社誌：故郷鎮守の森』南郷書房出版部、1985、126-127頁。
- (12) 風土工学デザイン研究所編『円山川風土記』兵庫県但馬県民局県土整備部、2000、3頁。
- (13) 同上、4頁。
- (14) 『出石町史』は天日槍の神話が、三品彰英が提唱した女性が日光により妊娠するという説話は大陸系の氏族の祖先伝承（蒙古、満州族）

## 神話と祭礼の文化地理学的研究

- であり、赤玉を生むという説話は南方海洋系の祖先伝承（新羅、加羅）であるという考え方の複合系を示す高句麗の朱蒙伝説と類似していることを指摘し、天日槍が率いる渡来人の一族が出石に君臨したと推測している。（出石町史編集委員会編『出石町史』第1巻、通史編上、出石町、1984、136-143頁。）
- (15) 五社大明神とは、但馬地方を開拓した絹巻神社（豊岡市気比）・小田井縣神社（豊岡小田井）・出石神社（豊岡市出石町）・養父神社（養父市養父市場）・粟鹿神社（朝来市山東町）の総称である。
- (16) 出石町教育委員会編・発『出石の民話・昔ばなし』1998、154-155頁。
- (17) 出石町教育委員会編・発『袴狭遺跡内田地区発掘調査概報：袴狭遺跡周辺官衙関係遺跡の調査』1995、39頁。
- (18) ふるさと文庫編集委員会編『八鹿のむかし話』八鹿町、1982、19-24頁。
- (19) 民俗学研究所編『民俗学辞典』岩出貞夫、1951、475頁。
- (20) 獅子舞は広義の意味では踊りに分類されるところと考えられるが、『日本祭礼地図Ⅲ 秋季編』は踊りと獅子舞を別々のものとして記述していたので、本論ではそれにしたがって表1を作成した。
- (21) 角川日本地名大辞典編集委員会 竹内理三編『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』角川書店、1988、214頁。
- (22) 中島喜市『八鹿町史』上巻、八鹿町役場、1971、44-45頁。
- (23) 八鹿町上小田にも似たような大蛇伝説が残っているが、上小田の大蛇は別の谷を下ったために被害は出なかったとされ、八朔は行われていない。
- (24) 現在は舞鶴市の大字となっている今田・堀・池ノ内下・布敷・別所・上根・寺田・白瀧・岸谷の9ヵ村が合併して池内村が成立した。役場は布敷に設置された。（角川日本地名大辞典編集委員会竹内理三編『角川日本地名大辞典 26 京都府』上巻、角川書店、1982、110頁。）
- (25) 旧池内村の地域では、八朔をエトンビキ・エントンビキなどと呼んでいるが、古老によると、その由来は辰を作成して干支で引くためという。
- (26) 「我が郷土」郷土史研究会編・発『郷土史「我が郷土」池内』1999、7頁。
- (27) 同上。
- (28) 以前は腰にトンガラシを挿し、女性を見つけると追いかけてまわしてトンガラシを舐めさせたといい、これには女性を男性に従属させる意味があるとされている。（金田久璋『森の神々と民俗』白水社、1998、154-155頁。）
- (29) 前掲注26、7頁。
- (30) 以前は竹の先に鷹の爪をつけて、女の子を見つけると追いかけてまわして舐めさせたという。（金田久璋『森の神々と民俗』白水社、1998、155-156頁。）
- (31) 前掲注26、153頁。
- (32) 『加佐郡誌』は、舞鶴市上根に舟つなぎ岩があることから、かつて池内は湖であったといい、それが池内の名の由来であるとしている。（京都府教育会加佐郡部会編『加佐郡誌』名著出版、1972、167頁。）
- (33) 角川日本地名大辞典編集委員会竹内理三編『角川日本地名大辞典 26 京都府』上巻、角川書店、1982、110頁。
- (34) 荒木信次朗編・発『朝来村史』1944、143頁。
- (35) 匹見町教育委員会編・発『新植原遺跡発掘調査報告書』1987、65頁。
- (36) 矢富熊一郎『石見匹見町史』島根郷土史会、1965、73-82頁。
- (37) 同上、86-90頁。
- (38) 田原大元神社は田原川と大南迫川の岐に位置する神社で、御神体は木片を2つ合わせ、中に銅鏡が蔵してあるが、見てはならないとされている。田原大元神社に関する記録は殆ど残っていないが、明治27年（1894）に御神体と御殿を再建した際の記録は残されている。（島根県立益田高等学校編・発『高津川総合学術調査研究報告』1963、150-151頁。）
- (39) 匹見町誌編纂委員会編『匹見町誌 現代編』益田市、2007、489頁。
- (40) 『匹見町誌 現代編』では現在地不明となっているが、藁蛇神事に参加していた古老の話



や延宝8年の青原手鑑から、田原大元神社は元青原村の奥殿から勧請したと考えられるが、現地の確認は出来ていない。

- (41) 前掲注 36、92-93 頁。
- (42) 淀江町編・発『淀江町誌』1985、12-13 頁。
- (43) 前掲注 42、31-85 頁。
- (44) 稲吉から出土した土器は埋葬用に造られた甕棺で、航洋舟の絵が描かれていることから、甕棺に葬られた人物は航海に関係した人物であると推定されている。また、舟の漕ぎ手はオール漕法ではなく、櫂を持って漕ぐ諸手船漕法を使用している。諸手船は淀江の対岸に位置する島根県美保関湾に今でも残っているため、美保関湾との関係が指摘されている。(淀江町編・発『淀江町誌』1985、54-85 頁。)
- (45) 角閃安山岩製で体長約 150cm、国指定の重要文化財に指定されている。もともとは上淀の字石馬、もしくは字山石馬に石馬大明神として祀られていたが、明治初年に天神垣神社に遷し、現在に至る。(淀江町編・発『淀江町誌』1985、130-133 頁。)
- (46) 前掲注 42、54-85 頁。
- (47) 鳥取県教育文化財団『福岡遺跡：鳥取県西伯郡淀江町』1992、6 頁。
- (48) 大山寺は鳥取県西伯郡大山町の大山中腹にある天台宗別格本山の寺で、本尊は地蔵菩薩である。大山はもともと霊山で、『出雲国風土記』は大山を大神嶽と記し、大国主命が国引きの際に杭にした山だと伝えている。(平凡社地方資料センター編『日本歴史地名体系 第 32 巻 鳥取県の地名』平凡社、1992、616 頁。)
- (49) 足立正『宇田川村史』鳥取県西伯郡宇田川村役場、1915、9 頁。
- (50) 天神垣神社は上淀の旧村社で、古くは天満宮や天神とよばれていたが、菅原道真を祀る天神とは異なり、祭神の少名毘古那命が手間之天神と呼ばれていたことに由来する。撰社には、大宮大明神と呼ばれた上淀神社があり、大己貴命・譽田別命・下照姫命・天稚彦命が祀られている。古老によると、以前は天神垣神社ではなく、大宮神社で藁蛇を作成していたそうだが、詳細は不明である。また、天神垣神社は古くは大社であったが、中世に兵火

に合い一度は零落したものの、天正 13 年に再興したとされている。(足立正『宇田川村史』鳥取県西伯郡宇田川村役場、1915、10-11 頁。)

- (51) 現在は頭部のみもち米の藁を使用しているが、昔は胴体ももち米の藁を使用していた。また、藁蛇の作成に女性は参加できない。
- (52) 淀江中央公民館歴史教室編・発『大山みち：道標と石地蔵が語る大山信仰』1979、153-154 頁。
- (53) 高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正『文化地理学入門』東洋書林、1995、187 頁。
- (54) 同上、188 頁。
- (55) 同上。
- (56) 同上、190 頁。
- (57) 同上、192 頁。
- (58) 柳田国男『柳田国男全集』第 5 巻、筑摩書房、1998、191-330 頁。
- (59) 松本修『全国アホ・バカ分布考：はるかなる言葉の旅路』新潮社、1996。
- (60) 佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014、158 頁。
- (61) 前掲注 53、198 頁。
- (62) 亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史 資料編第 5 巻』1998、558-559 頁。
- (63) 同上、622 頁。
- (64) 田中勝雄「山水伝説：統南桑民譚雑録二」『旅と伝説』第 10 年第 10 号、三元社、1937、43 頁。
- (65) 前掲注 1、117 頁。

## 参考文献

- ※注に掲載された文献は省いている。
- 足利健亮「難波京から有馬温泉を指した計画古道」、藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究 (上)』大明堂、1978、109-118 頁。
- 大貫恵美子『日本文化と猿』平凡社、1995。
- 大貫恵美子「文化と分類－アイヌの空間概念を例として－」、『思想』第 676 号、岩波書店、1980、26-45 頁。
- 小松和彦編『怪異の民俗学 8 境界』河出書房新社、2001、171-195 頁。
- 鈴木幸平「15. 八朔祭と地頭町の変化」『金沢大学

## 神話と祭礼の文化地理学的研究

文化人類学研究室調査実習報告書』第1999集、金沢大学、1999、122-129頁。

高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局、1982。

田尻佳之「16. 八朔祭礼：地頭町を中心に」『金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書』第1999集、金沢大学、1999、130-143頁。

西田良子「7. 八朔祭りと里本江」『金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書』第1998集、1998、51-60頁。

八木康幸「村境の象徴論的意味」、関西学院大学人文学会編『人文論究』第34巻第3号、関西学院大学、1984、1-22頁。

吉野裕子『蛇』講談社、1999。

牛承彪「奈良盆地における藁の大蛇」、関西外国語大学『研究論集』第94号、2011、81-98頁。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、終始適切な助言を賜り、丁寧に指導して下さった京都学園大学佐々木高弘教授に、深く感謝いたします。また、調査にご協力いただいた、上谷俊道氏(兵庫県養父市)、久手嘉朗氏(京都府舞鶴市)、藤原美彌雄氏(鳥根県益田市)、上淀白鳳の丘展示館(鳥取県米子市)、鳥根県益田市役所文化財課の皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

## 【資料1】

	実施日	祭礼名	住所	盆地・谷筋	分類	内容	典拠
1	1月3日	槻原の綱掛神事	奈良県生駒郡平群町槻原	田原盆地に属している。	道切り	約40mの男綱と約12mの女綱を擦り合せた後、人を心臓に見立てて巻き込み龍に模したジャを作る。横倒して人が出た後、綱を男衆の上に転がし、綱に上って踏みつける。最後に綱を竜田川を跨ぐ格好で張り渡して終了する。	・『奈良大和路の年中行事』13頁。
3	1月7日	じんがんなわ祭り	東京都足立区西保木間2丁目	盆地ではない。	道切り	稲藁で大蛇を作り、境内のヒマラヤ杉に巻きつける。悪疫や飢饉が続いた際、蛇を捧げて祈ったところ、おさまったという故事による。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』117頁。 ・「じんがんなわ祭」< <a href="http://members2.jcom.home.ne.jp/ichikondo/01%20jingannawamat.suri.html">http://members2.jcom.home.ne.jp/ichikondo/01%20jingannawamat.suri.html</a> >(参照2015/10/15)
4	1月7日	山の神祭	滋賀県大津市南志賀	近江盆地に属する。	道切り	自治会役員・神社総代が藁で蛇を作る。蛇を大夫の体に巻きつけ、山の神へ向かい、祈禱後、祠の横に蛇を設置する。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』211頁。 ・ヤッサシイ会「活動状況(2014年)」< <a href="http://hannokihara.web.fc2.com/omelet5.html">http://hannokihara.web.fc2.com/omelet5.html</a> >(参照2015/10/16)
9	1月15日(昔は2月10日)	ジャ行事	京都府宮津市山中	谷筋に位置し、神子川が流れている。	道切り	全長約2.5mのジャを3体作る。完成後、ジャに神酒を注ぎ、村境の皆原と接するシモンチャヤ・栗田峠・新宮峠の3か所に掲げる。	・『宮津市史』
10	1月15日～20日のどこか	波路のコトのジャ行事	京都府宮津市波路	谷筋に位置している。	道切り	全長1.2mのジャを作る。完成後、中の谷と宮の谷の入り口の柿の木に、伊勢音頭を歌いながらジャを掲げて終了する。	・『宮津市史』
11	1月17日	国府台の辻切り	千葉県市川市国府台	関東平野の南部に位置する平地で、盆地ではない。	道切り	藁で2mほどの蛇を4体作る。蛇に神酒を注いだ後、村境や辻など4か所に巻きつけて終了する。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』107頁。 ・市川市(2015)「文化財－国府台辻切り」< <a href="http://www.city.ichikawa.lg.jp/edu09/1541000011.html">http://www.city.ichikawa.lg.jp/edu09/1541000011.html</a> >(参照2015/10/15)

12	1月18日・19日	蛇綱	京都府宮津市今福	周囲を山に囲まれ、中央部が低地になっている。	道切り	藁蛇作成後、老人が蛇綱を担いで家々を回る。その後、境内の銀杏の木に掛けて終了する。起源は江戸時代悪病を防ぐため藁蛇を村の入り口に掲げた故事による。	・『宮津市史』 ・「今福の蛇綱(京都府宮津市今福)< <a href="http://www.geo.cities.jp/k_saito_site/album7.html">http://www.geo.cities.jp/k_saito_site/album7.html</a> >(参照2015/10/15)
13	1月25日	井野の辻切り	千葉県佐倉市井野町	関東平野南東部に位置する、盆地ではない。	道切り	藁で長さ約5mの大蛇を6体、小さい蛇を戸数分作る。神酒を注いだ後、大蛇は村境や辻にある木に巻きつけ、小さい蛇は各戸の入り口にかける。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』108頁。 ・高橋敬三「井野の辻切り」< <a href="http://takakei3web.fc2.com/inoutujigiri.html">http://takakei3web.fc2.com/inoutujigiri.html</a> >(参照2015/10/15)
18	不定期(閏年の旧1月)	荒神さん	鳥取県米子市淀江町中西尾	背後を山々に囲まれた丘陵地である。	道切り(荒神)	閏年の旧暦1月に宇田川神社で行われる。藁で大蛇を作って集落を練り歩く。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』274頁。
19	2月2日	荒神さん(オロチ練り)	鳥取県米子市淀江町富繁	背後を山々に囲まれた丘陵地である。	道切り(荒神)	閏年の2月2日に行われる。荒神組が当番家に藁を持ち寄って、体重8kg、体長約20mのオロチを作る。完成後、各戸を練り歩く。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』274頁。
20	2月9日	二ノ講	京都府京都市山科区小山中島町	山科盆地に属している。	道切り	大蛇退治があったと伝えられている2月9日に、約300束のもち米の藁を使って数十mの大蛇を作り、古い大蛇と交換して音羽川と山科川の境の川べりに奉納している。	・京都新聞「ふるさと昔語り」2007/2/7掲載< <a href="http://www.kyotomp.co.jp/info/sightseeing/mukasikatari/070207.html">http://www.kyotomp.co.jp/info/sightseeing/mukasikatari/070207.html</a> >(参照2015/11/16)
21	2月10日	竹割祭(護願神事)	石川県加賀市大聖寺敷地町	周囲を山に囲まれ、中央部が低地になっている。	道切り	白衣の若者が2mほどの青竹をところ構わず打ち叩き粉々にする。次いで蛇に模した長さ20mほどの綱を拝殿から引きずり出し、引き回した後、大聖寺川に投げ捨てる。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』146頁。 ・菅生石部神社(2014)「御願神事」< <a href="http://www.tenjin.or.t v/take/wari.htm">http://www.tenjin.or.t v/take/wari.htm</a> >(参照2015/10/15)
23	2月の初午	中野木の辻切り	千葉県船橋市中野木	盆地ではない。	道切り	藁縄で長さ6mほどの大蛇を東西2組に分かれて2匹作成する。完成後、大蛇を本殿前で向かい合わせに据え、神酒を飲ませる。集落の南西と北東の道路脇の立木に巻きつける。	・『年中行事大辞典』660頁。 ・教育委員会文化課(2011)「中野木の辻切り」< <a href="http://www.city.funabashi.chiba.jp/kurashi/study/0005/p008867.html">http://www.city.funabashi.chiba.jp/kurashi/study/0005/p008867.html</a> >(参照2016/1/5)
24	閏年の3月第一日曜(昔は閏年の2月2日)	赤松の荒神祭	鳥取県西伯郡大山町赤松	周囲を山に囲まれ、中央部が低地になっている。	道切り(荒神)	藁で長さ約25mの大蛇を作る。頭には御幣を戸数分立て、胴に男根をつける。鼻と目玉の間にこぶを11個作る事で年老いた大蛇を表す。当日、神事後、大蛇を担いで集落を練り歩き、日吉神社境内の荒神の玉垣内にとぐろを巻いて奉納する。	・『日本祭礼地図 IV 冬・新春編』274頁。 ・鳥取県博物館(2007)「鳥取県指定無形民俗文化財赤松の荒神祭(荒神講)」< <a href="http://site5.toriinfo.co.jp/p/museum/digital/illustrated_book/3/2/">http://site5.toriinfo.co.jp/p/museum/digital/illustrated_book/3/2/</a> >(参照2015/10/16)

## 神話と祭礼の文化地理学的研究

29	5月4日・5日	すすつけ祭(ノグツツアン)	奈良県橿原市地蔵町	奈良盆地の南東に位置している。	道切り(野神)	約5mの8本足の藁のジャと、雄雌2本の御幣、牛の絵を描いた絵馬を作る。5日早朝、子供達が野神さんにジャ・飾り物・供え物を奉納に行く。行きは静かに、帰りは大声で叫びながら帰る。	・『日本祭礼地図Ⅰ 春季編』266頁。 ・総合政策部観光政策課「すすつけ祭り」< <a href="http://www.city.kashihara.nara.jp/kankou/own_kankou/saijiki/5_susutsukematsuri.html">http://www.city.kashihara.nara.jp/kankou/own_kankou/saijiki/5_susutsukematsuri.html</a> >(参照2015/10/15)
32	5月24日	安行原の蛇造り	埼玉県川口市大字安行原	盆地ではない。	道切り	頭は目・耳・鬚などを付け、舌は付近の密蔵院の住職によって書かれた祈願文を結び付ける。胴は長さ約10mで、3つ編みにして作成する。完成後、頭を檜の幹の股に置き、胴を木に巻きつけて終了する。起源は益虫とよぶ蛇を農民が祀っていた故事による。	・川口市役所広報課(2009)「広報かわぐち市長のふれあい訪問」< <a href="http://www.city.kawaguchi.lg.jp/kbn/Files/1/01050101/attach/P28.pdf">http://www.city.kawaguchi.lg.jp/kbn/Files/1/01050101/attach/P28.pdf</a> >(参照2016/1/20) ・川口市教育委員会が作成したチラシ
35	6月5日(旧暦5月5日)	シャカシャカ祭(蛇巻き)	奈良県橿原市上品寺町	奈良盆地の南東に位置している。八坂神社の付近は飛鳥川が流れている。	道切り(野神)	子供が主体となって麦藁で長さ6~7mほどのジャを作る。完成後、ジャを担いで家々を巡行し、途中で溜池によって蛇に水を飲ませる所作を行う。その後、ヨノミにジャを巻きつけて終了する。ノガミ塚に住みついていた大蛇を退治した故事による。	・『日本祭礼地図Ⅱ 夏季編』220頁。 ・『奈良大和路の年中行事』96頁。
37	6月第一日曜日(昔は6月5日)	今里の蛇巻き	奈良県磯城郡田原本町今里	奈良盆地のほぼ中央部に位置している。	道切り(野神)	中学生以上の男子が麦藁で長さ約18mの蛇を作る。先頭は農具の模と絵馬をドサン箱に入れて担ぎ、その後ろを蛇が人を巻き込みながら練り歩く。神社に戻ってくると、野神さんの榎に、頭をアキの法学に向け、昇り竜の根元に頭を置き、下り竜の形に吊るして祭りは終了する。旧暦の端午の節句に因む。	・『日本祭礼地図Ⅱ 夏季編』220頁。 ・『奈良大和路の年中行事』95頁。 ・『日本祭礼地図Ⅱ 夏季編』220頁。 ・『奈良大和路の年中行事』95頁。
38	6月第一日曜日(昔は6月5日)	鍵の蛇巻き	奈良県磯城郡田原本町鍵	奈良盆地のほぼ中央部に位置している。周囲に溜池が多数存在している。	道切り(野神)	境内で当屋と17歳以下の男子で藁と麦で長さ約12mの竜(蛇)を作る。農具の模型と絵馬をドサン箱に入れる。お祓いを受けた後、竜を担いで町内を練り歩く。最後に北中学校前のはったはんという八王子塚の榎の根元に頭を置き、下り竜の形に吊るして祭りは終了する。	・『日本祭礼地図Ⅱ 夏季編』220頁。 ・『奈良大和路の年中行事』94頁。
47	8月16日	エトンビキ	京都府舞鶴市今田	谷筋と平地に位置している。	道切り	藁で竜を作る。各戸を回り、最後に木ノ部のキンセン神社の下木立に北を向けて絡めて終了する。上殿城に夜な夜な現れる鬼を、大蛇を作成して退治したことに因む。	・『郷土史「我が郷土」池内』 ・『森の神々と民俗』
49	8月下旬	えちごせきかわ大したもん蛇まつり	新潟県岩船郡関川村	関川盆地に属する。集落内を荒川が流れている。	道切り	竹と藁を持ち寄って、長さ828mの胴体を作る。蛇を担いで村中を練り歩き、最後は村役場前でとぐろを巻いて終了する。起源は大里峠の大蛇を食べて大蛇になった女伝説に由来する。	・関川村「大したもん蛇まつり」< <a href="http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/info/sogo/taisitamonyja/index.html">http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/info/sogo/taisitamonyja/index.html</a> >(参照2015/10/16)

51	9月1日(昔は旧暦8月1日)	エトンビキ	京都府舞鶴市布敷	谷筋に位置している。	道切り	不明	・『郷土史「我が郷土」池内』
52	9月1日(昔は旧暦8月1日)	エントンビキ	京都府舞鶴市別所	谷筋に集落が点在しており、集落内を池内川が流れている。	道切り	もち米の縄をなつて約12mのジャを子供達で作成し、蛇を連れて各家を訪れてお駄賃を貰う。蛇に噛まれると幸運に恵まれるという。仲井・谷家の荒神がある裏山へ大蛇を担ぎ上げ、椎の巨木の根元に巻きつけて終了する。昔、大蛇が里に現れ娘をさらっていった。その際、逃げまどう娘を土蔵や便所に隠した故事による。	・聞き取りを基に作成 ・『森の神々と民俗』154-155頁。 ・『郷土史「我が郷土」池内』
53	9月1日(昔は旧暦8月1日)	エトンビキ	京都府舞鶴市上根	谷筋に集落が点在しており、集落内を寺田川が流れている。	道切り	少年団が稲藁とススキとキビで約3mの蛇を作る。蛇を担いで下地から上地まで掛声をかけあつて回り、頭をもった上級生が戸口に立って祝言をのべる。池内川の左岸にある山の神に参拝し、小祠の左横に藁蛇を奉納して終了する。疫病を鎮めるために始まった。	・聞き取りを基に作成 ・『森の神々と民俗』155-156頁。 ・『加佐郡誌』
54	9月1日(昔は旧暦8月1日)	アクマバライ	京都府舞鶴市大波上	盆地ではないが、周囲を山々に囲まれている。	道切り	小学生の男子が稲藁で約2mのジャを作成する。耳はビワの葉、目はナスビ、牙はトウガラシ、舌はバラで飾り付ける。完成後、集落内を練り歩き、全戸まわり終えると、青連寺参道口にある大乘妙典一石一宇塔に藁蛇を奉納して終了する。	・聞き取りを基に作成
56	9月6日(昔は旧暦8月1日)	上淀の八朔綱引	鳥取県米子市淀江町福岡上淀	盆地ではないが、背後を山に囲まれ、丘陵地に集落が点在している。	道切り・綱引き	藁でクチナワと呼ばれる大蛇を製作する。完成後、荒神の周囲を右回りに3回まわり、頭を石灯籠の上に乗せ1年間安置しておく。その後、胴で3回綱引きを行い、法界さんと呼ばれる村境まで運び、とぐるを巻いた状態にして終了する。	・聞き取りを基に作成 ・『日本祭礼地図Ⅲ秋季編』261頁。 ・『淀江町誌』1156頁。
58	旧暦11月10・11日	マイタマイタ神事(御袴祭)	鳥取県米子市夜見町	美保湾に面した平地のため、盆地ではない。	道切り(荒神)	「マイタマイタ」と声を掛けながら藁蛇を作る。完成後、蛇を荒神の厨子に供え、今年の頭屋から来年の頭屋に頭渡しが行われる。翌日、今年の頭屋が夜見神社の松の垣根に蛇を巻きつけて終了する。起源は開村の祖先を祀り収穫を感謝するために始まったと伝えられている。	・『日本祭礼地図Ⅲ秋季編』265頁。 ・鳥取県立博物館「マイタマイタ神事」< <a href="http://digitalmus.eum.pref.tottori.jp/contents/jin603_detail.asp?cd=13505">http://digitalmus.eum.pref.tottori.jp/contents/jin603_detail.asp?cd=13505</a> >(参照2015/10/17)
61	11月28日	幣祭(申し上げ)	鳥取県西伯郡西伯町法勝寺	周囲を山に囲まれ、中央部が低地になっており、集落内を川が流れている。	道切り(荒神)	地区内を7組に分け、毎年交代で祭りを行い、収穫を感謝する。前夜、当番宿で藁の蛇と御幣を作り、当日、これを荒神宮に奉納する。	・『日本祭礼地図Ⅲ秋季編』266頁。 ・鳥取県立博物館「申し上げ」< <a href="http://digitalmuseum.pref.tottori.jp/contents/jin603_detail.aspcd=17107&amp;picno=0">http://digitalmuseum.pref.tottori.jp/contents/jin603_detail.aspcd=17107&amp;picno=0</a> >(参照2015/10/17)
62	12月第一日曜日	蛇形祭	岡山県新見市哲西町上神代日長谷	集落は谷筋に位置し、集落内を三光川が流れている。	道切り	長さ6m、重さ40kgの大蛇を作り、神酒を注いだ後、神社に奉納し祈願する。また、各家では小さい蛇を作り祭る。起源は大蛇退治後、悪い事が起きたため、祟りを鎮めるために祀った故事による。	・『日本祭礼地図Ⅲ秋季編』282頁。 ・岡山県立図書館「郷土情報ネットワーク 哲西町(現:新見市)蛇形祭(字幕付き)」< <a href="http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detailjp/id/kyoM_2007031115344358735">http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detailjp/id/kyoM_2007031115344358735</a> >(参照2015/10/17)